

第3章 東南海地震のインパクト

第1節 津波の被害

1944（昭和19）年12月7日の東南海地震によって発生した津波は、伊豆半島から紀伊半島までを襲った。渡辺（1998）によると、静岡県下田市柿崎では2.5m、愛知県一色町では1.5m、和歌山県新宮市では2.0m～5.0mの津波に襲われたが、最も高い津波に襲われたのは三重県であった。現在の尾鷲市では2.7m～9.0m（盛松・賀田）、伊勢町（錦村）では7.0m、南島町では5.5m～6.0m（吉津・神町）、熊野市では3.0m～6.3m（二木島）、紀伊長島町（長島町）では4.0mという津波に襲われた。津波による三重県の死者・行方不明者は589名、和歌山県の死者・行方不明者は50名にのぼった（宇佐美、2003）。

津波の衝撃は、沿岸住民に対して、大きな衝撃を与えた。そこで本節では、津波被害が顕著であった三重県の津波被災者の体験談を紹介し、津波が人々にどのような環境変化やインパクトを与え、人々はどのような心理・行動状態であったのかを明らかにしたい。

1 津波の体験談・郷土史

津波災害の被災地には、被災者による津波の体験談が多く残されるものである。しかし、1944年東南海地震は、第二次世界大戦末期の戦時報道管制の厳しかった最中の地震であったために、被害の具体的な報道は一切されなかった。その後、連続する空襲や戦後の混乱期・高度経済成長期の中で、被災体験は記憶の奥底に埋もれることとなり、被災体験談が語られ始めたのは、戦後数十年が経過した後のことであった。被災してからその体験が相対化されるまでに長い時間がかかったこともあり、地震津波のインパクトの大きさや死者数に対して、現存している体験談はそれほど多くない。表3-1は、2006年に三重県防災危機管理部地震対策室の奥野真行氏（当時）が作成した「三重県を中心とした、1944年東南海地震に関する体験談・郷土史等文献リスト」に、執筆者の木村玲欧が追補したものである。これを見ると、「体験談集」という体裁で残っている資料が少なく、ほとんどが市販されていないか、絶版であることがわかる。

本節では、津波を人々がどのように認識し、また津波が人々にどのようなインパクトを与えたのかについて、現存する三重県の体験談を紹介しながら論じていきたい。なお、一人ひとりの体験談のすべてを引用・紹介することは、紙面の都合上不可能であるため、筆者が体験談の選定・要約などを行い、資料に手を加えている。

表3-1 三重県を中心にした、1944年東南海地震等に関する体験談・郷土史等文献リスト

No	書名	著者または出版者	出版年	備考
1	恐怖のM8 東南海、三河大地震の真相	中日新聞社会部 編	1983	中日新聞社、中日新聞での連載をもとにした書籍
2	戦時報道管制下 隠された大地震・津波	山下文男	1986	新日本出版社、東南海地震とその37日後に発生した三河地震の被害・体験談
3	いのちありて 東南海地震の思い出	中村幸子	2003	南勢町における著者の体験談
4	東南海・南海地震誌	南勢町教育委員会	2005	南勢町における東南海地震の体験談
5	忘れない!あの日の大津波 東南海地震体験記録	南島町教育振興会資料センター一部 編	2000	南島町における東南海地震の記録と体験談
6	東南海地震津波より45年 地震体験談	紀勢町	1989	紀勢町における東南海地震の記録と体験談
7	ふるさと錦	奥野清見	1990	紀勢町錦における東南海地震の大津波記録(10ページ)を収録
8	体験談と記録集 昭和19年12月7日東南海地震津波	海山町郷土資料館・海山郷土史研究会	1994	海山町における東南海地震の記録と体験談
9	湾が空っぽになった日	山下秀之	1996	東南海地震の経験をもとに書いた小説。著者は当時、北牟婁郡桂城村(現紀北町海山区)在住。
10	東南海地震体験談集	尾鷲市立矢浜公民館	2001	尾鷲市矢浜地区における東南海地震の体験談
11	東南海地震体験談集(昭和19年12月7日)	尾鷲市立中央公民館	1995	尾鷲市立図書館にて確認、聞き取りや体験談をまとめたもの、被災者16人の避難経路地図つき、一部12・13と重複
12	東南海地震体験談	尾鷲市立中央公民館	1994	尾鷲市立図書館にて確認、体験談の手記、一部11・13と重複
13	昭和19年12月7日発生 東南海地震体験談集	尾鷲市総務課	1984	尾鷲市立図書館にて確認、体験談の手記、一部11・12と重複
14	新鹿の津波 三重県	新鹿津波調査会	2004	東南海地震による新鹿の津波被害の記録と体験談
15	二十世紀の自然災害 記録と145の証言	旧四日市を語る会	2000	東南海地震の体験談もあり
16	世にのこしたいとっておきの話 第2集	佐藤嘉臣 編	1994	東南海地震による新鹿の津波被害の手記、「津波の夢」(畑中均著)収録
17	東南海大地震と津波 その記録	熊野歴史同好会	1984	
18	熊野の大津波 敗戦直前の東南海地震	関口精一	1990	三重県立図書館にて確認
19	昭和19年12月7日東南海地震に関する踏査報告	愛知県防災会議	1975	北牟婁郡の体験談を含む震災状況調査(24ページ)を収録
20	三木里郷土史	尾鷲 今昔学習会	2005	尾鷲市立図書館にて確認
21	尾鷲市史年表	伊藤良、尾鷲市役所	1968	尾鷲市立図書館にて確認
22	ふるさと石造物	尾鷲市郷土館友の会	1980	尾鷲市立図書館にて確認
23	復刻郷土のしほなし	尾鷲市郷土館友の会	1976	尾鷲市立図書館にて確認
24	尾鷲市の文化財	尾鷲市教育委員会	1976	尾鷲市立図書館にて確認
25	見聞録集	尾鷲市立中央公民館	1984	尾鷲市立図書館にて確認
26	奥熊野の民俗 No.6	紀北民俗研究会	2001	尾鷲市立図書館にて確認
27	奥熊野の民俗 No.7	紀北民俗研究会	2002	尾鷲市立図書館にて確認
28	錦町誌			尾鷲市立図書館にて確認
29	奥熊野百年誌	武上千代之丞	1978	尾鷲市立図書館にて確認
30	南輪内村誌	倉本為一郎 編	1953	尾鷲市立図書館にて確認
31	阿児の石造物	阿児町文化財調査委員会	1985	阿児ライブラリーにて確認
32	読解・鶴方村の古文書	正木孝平	1998	阿児ライブラリーにて確認
33	志摩立神誌	中岡志州 編	1980	阿児ライブラリーにて確認
34	郷土志摩 第58号	志摩郷土会発行	1981	阿児ライブラリーにて確認(東南海地震の記述あり)
35	南島町乃石文	南島町教育委員会		磯部図書館にて確認
36	三浦小学校創立100周年記念 100年のあゆみ			紀伊長島図書室にて確認
37	紀伊長島町の文化財	紀伊長島町教育委員会	1990	紀伊長島図書室にて確認
38	三重県下の海の石碑・石塔(2)一津波関係の碑・供養塔一	平賀大蔵 編纂	1990	年報・海と人間、23(鳥羽・海の博物館)
愛知	地震体験記録集	愛知県	1978	関東大震災、東南海地震、三河地震の体験談集
愛知	東南海地震・三河地震体験談集 大地震に備えて	愛知県西尾市	1974	東南海地震、三河地震の体験談集
愛知	三河地震60年目の真実	木股文昭・林能成・木村玲欧	2005	中日新聞社、東南海地震についても一部触れている
静岡	疎開児童が調べた「東南海地震被災の記録」：昭和19年12月7日 東京都雑谷国民学校袋井疎開学園東南海地震被災の記録	浅場ケイ子	2004	新風書房、当時疎開していた袋井での被災の記録
静岡	昭和19年東南海地震の記録―静岡県中遠地域を中心として	東南海地震記録集編集委員会	1982	静岡県中遠振興センター、静岡県地震防災センターにて確認
静岡	「写真でみる東南海地震」―静岡県中遠地域を中心として	「写真でみる東南海地震」編集委員	1994	静岡県中遠振興センター
静岡	昭和19年東南海地震に学ぶ	東南海地震記録集編集委員会	1981	静岡県中遠振興センター
静岡	昭和19年東南海地震の体験から	「東南海地震の体験から」編集委員会	1987	静岡県中遠振興センター
長野	戦争が消した諏訪「震度6」 昭和19年東南海地震を追う	宮坂五郎・市川一雄	1992	信濃毎日新聞社、東南海地震の体験談をもとにしたもの

注) 三重県防災危機管理部地震対策室奥野真行氏作成、木村玲欧追補

2 津波の形容

津波が、人々にどのようなインパクトを与えたのかを考える際に、「津波が来た!」「これは津波だ!」というように、人々が最初に津波を認識したときの津波の形容・人々の心理状態を見ていくことによって、そのインパクトを理解することができる。体験談をまとめていくと、①普段は見えない海の底が見えた、②海面が盛り上がりが見えた、③大波としてすごい速さで向かってきた、④静かに水が満ちながら迫り寄ってきた、⑤川上に向かって泥水がさかのぼってきた、という5つのパターンで、津波を認識していることがわかった。

①、②については、津波の波の部分を見ただけではないが、通常とは異なる事態に遭遇

したときにその事態を「津波」だと認識していた例である。①では「すごい勢いで波が引いて」「普段は見えない海底が見えた」とき、②では「海面は、大きな紙風船をふくらますように水位があがった」「そのまま海面がふくれ上がる」ときに、その事態を津波として認識していた。

また③～⑤については、津波の「波」や「水」の部分の直接目撃することで、津波だと認識していた。津波はその形状から、主に海岸付近で感じる「WAVEとしての津波」と、主に内陸部で感じる「FLOODとしての津波」の2種類に分けられる。③では「ものすごい速さで」「山の如くに白い煙をたてて押し寄せる」「ナイアガラのような」と表現でされるように、急速に迫り来る高波を見たときに津波であると認識し、一方、④では「静かに静かにぶくぶくとどンドン満ちてきた」「底から温泉のように湧いて来る」「台風の波とちがってグーと増えてくる」というように、静かではあるか抗いがたい勢いで、水が満ちてきたときに津波だと認識していた。⑤では「川上にむかって流れてきて、みるみる泥流となった」「石油タンクが川を遡った」というように、ものを巻き込みながら川をさかのぼっていく泥流の姿を、津波だと認識していた。

まとめると、引き潮から来る津波の場合は④、いきなり盛り上がってくる津波の場合は⑤のような事態を津波だと認識していた。また、津波の波や水の部分を直接目撃するときには、WAVEとしての大波を直接見たり、FLOODのようにひたひたと、しかし確実に増していく水量や、普段はあり得ない泥流が川をさかのぼるような事態に対して、人々は「これは津波だ」「津波が来た」と認識しており、日常では決して出会うことのない大きな環境変化・インパクトを人々に与えていたことがわかる。

(1) 普段は見えない海の底が見えた

1) 島勝湾の黒茶色の海の底

海山町 伊藤さだゑ 資料8

観音山から海をみると、波がわき上がるように島勝湾いっぱいになり、世古の堤防、浜、魚市場、和具へ行く道も、赤島の下岩肌も、そして島の上の松やイマメの木も全部波で見えなくなってしまった。しかし、次の瞬間、急にすごい勢いで波が引いていった。その時、黒茶色をした海の底一面が見えた、と思った瞬間また波がすごい力でわき上がり押し寄せてきた、そしていろいろなものをさらいながら波が引いていった。これが3、4回繰り返された様に覚えている。島勝浦全部が流されてしまったのではないかと、怖くて体の震えが止まらなかった。50年経った今でもハッキリと目の底に焼き付いて忘れられない。

2) 普段は見えない海の底

海山町白浦 奥村ふみ(当時25歳) 資料8

地震から10分ほどして浜の方から「津波がくるぞー」という声があったので、沖を見ると、海の水がごっそり引いて普段は見えない海の底が見えた。それは真っ赤で、赤い火のようだった。

3) 海底が見える

海山町久木国民学校教諭 松永光生 資料8

長い地震のあと、運動場から町の様子を見下ろしたとき、びっくり仰天した。いつも満々とたたえている湾の海水はすっかり干上がって、しっとりと湿った海底が見えるではないか。アッこれは津波だ。津波なんてどんなものか見たことはない。ただ「稲むらの火」のことが一瞬脳裏をかすめた。

4) 引き潮の磯はサンゴ色

熊野市新鹿国民学校教諭 仲俊郎 資料14

大吹峠から遊木戸の方を眺めると、磯はサンゴ色で赤黒く底の方まで見えていたので、これは津波にちがいないと直感した。

(2) 海面が盛り上がりが見えた

5) 海面は大きな紙風船をふくらますように

熊野市新鹿町 浜口民夫 資料14

小型伝馬船(漕舟)で倭石島の南100mの地点にさしかかったとき、突然海底から強烈な震動波を感じた。舟底が割れる程激しく続けざまに叩かれたので度肝を抜かれた。湾をとりまく山のあちこちで崖崩れがあったので「大地震だ」と直感した。そこで船中4人で議論して、甫本磯に引き返すことにして必死の力漕でやっと磯に足を踏みしめることができた(この間6~7分くらい)。海面に目を凝らすと、大きな紙風船をふくらますように、おもむろに水位が上がってくるのが不気味だった。

6) 潮が引く気配はなく、そのまま海面がふくれ上がる

尾鷲市賀田国民学級教諭 喜田勉 資料14

子どものころ聞いた話では、熊野の新鹿では津波が来る前には倭巖付近まで潮がひくとのことだったが、この度の尾鷲の賀田湾では全く潮のひく気配などなく、そのまま海面がふくれ上がったという感じだった。

(3) 大波としてすごい速さで向かってきた

7) 高い波は山の如くに白煙を立てて押し寄せる

南島町 守田幹(当時吉津村国民学校初等科1年) 資料5

かつてない大きな地震が揺れ出してくると同時にカンカンと非常召集の鐘がなりだした。全生徒が急いで集まるとどこからか「津波だ」と大声で叫ぶ声が聞こえてきた。早速先生の指図に従って、近くの山へ登った。後ろを見ると、高い高い高い波は山の如くに白い煙を立てて押し寄せてきた。それを見ると、自分の体はすくむような心地がして何とも言えぬ恐ろしさを感じた。みるみる家は山の方へ走って来る。電柱が倒れ船が波におされて流れてきて、陸上は僅か一瞬の暇に海となった。

8) まるでナイヤガラの滝

南島町東宮地区 出崎孝重 (当時15歳) 資料5

地震のあと、今の南島小学校のあたりまで歩いてきたら、前の海の水が上がってきたのが見えた。ふと沖を見たら真っ白になった線が一段と上がって見えた。まるでナイヤガラの滝のようだった。それがこちらへ押し寄せてくるのが見えて津波だとわかり、みんなで走って逃げた。ゆれてから20分経っていない。

9) 3～4メートルほどの波を唾然と見るだけ

尾鷲市矢浜 北村利行 (当時18歳) 資料10

家は矢浜でも高台にあった。地震で家から飛び出し数分後、下の方から津波だという声を聞く。海を見るともう二本松 (東邦石油) 辺りまで来ていた。材木などを巻き込んだ3～4mの波が巻立てて来るのを、ただ唾然と見るだけだった。

10) ゴーというトラックが近づいてくるような音

尾鷲市賀田町 榎本むゆか 資料12

地震のあと、「ゴー」という、まるでトラックが何台もが近寄ってくるような音を聞き、近くの人「津波が来るぞ」という声を耳にして、早速近くの畑から山に登った。すると間もなく山のような大きな波が重なるようにして入り江に向かって押し寄せていき、その波が引くようになると、何軒かの家の屋根だけ見せて、材木やその他色々の物がどんどこ沖へ沖へと流されていくのが見えた。

11) 土もろとも押し流される

南勢町五ヶ所浦 山本光善 資料4

先生の「みんな逃げろ、津波が来る」という言葉で、私は急斜面の坂道を一気に駆け上がった。海を見ると、湾の潮が海岸をものすごい速さで超え、濁流となって前田の田圃に流れ込んで来た。そのうち海岸沿いの松林は大小といわず、根元からごっそり抜き取られ、土もろともちょうど島が動いているように、ゆっくりと奥の方へ押し流されていった。

(4) 静かに水が満ちながら迫り寄ってきた

12) 津波の引き潮によって破壊される

尾鷲市須賀利 武藤郁子 資料12

須賀利小学校の1年生31人を受け持っていた。地震が終わった時、村の人が「津波が来るぞ！津波が来るぞ！」と叫んでいた。私は裏山へ児童を促し、全員避難させた。津波は静かに静かにぶくぶくとどンドン満ちてきた。津波の引き潮の偉大な力によって家が流されたり壊されたりするのがはっきりとわかった。

13) 津波が温泉のように湧いてくる

尾鷲市港町 岩崎桃枝 資料12

地震のあと、おばあさんの「今晚は津波が来てたいへんなことになる」という言葉を聞いて

て準備をしていたときに、浜の方から「津波や」と呼ばてきた。そこで新道へまっすぐ逃げた。波は底から温泉のように湧いて来る。その恐ろしさは目について何日も寝られなかった。逃げる途中で、中井の橋を渡ったが、橋と海水の間は1 mくらいの感覚しかなく、泥水になってぼこぼこ湧くようにして増えており、ザーアザーアと流れるようではなかった。昔から地震が起きてから津波が来るまで時間があるので、御飯を炊いてから逃げたらよいと聞いていたが、そんな暇はなかった。

14) 台風の波と違って「グー」と増えてくる

紀勢町 谷口吉蔵（当時34歳）、谷口貴代（当時31歳）資料6

地震が揺すってから第1波が来るまで約30分くらいあったと思う。台風の波みたいにグワーと来ない。「グー」と増えてくる。第1波で屋根が取られ、第2波が引いていく時、家の物が流された。

(5) 川上に向かって泥水がさかのぼってきた

15) 川上へのながれがみるみる泥の急流へ

海山町五ヶ所浦 富田紀子 資料4

当時、役場に勤めていた。地震のあと、下の神社の五ヶ所川の水が川上に向かって流れてきて、みるみるうちに泥の急流になった。今でもあの流れを思うと、もしも人が落ちたら助からないと思う。

16) 石油タンクが流される

尾鷲市矢濱 塩崎泰治（当時13歳） 資料10

地震後に、開墾山に急いで避難した。2回目の津波のときに、天満の入り口にあった石油タンクがすごい速さで中川を遡り、瀬木山の下石垣にぶつかった。あれよあれよという間だった。

3 津波に追われる・浸る・流される・飲み込まれる

津波の体験談を見ていくと、津波と物理的に近接したり接触したりすることによって、津波のインパクトを表現しているものも多い。それらをまとめていくと、①津波に追われる、②津波に浸る、③津波に流される、④津波にのみ込まれる、の4つの体験に集約される。

①は「どろどろになって押し寄せてきた」「どこまで追いかけてくるのか」というように、必死で逃げながらも執拗に追ってくる津波を描いている。②は「私の首まで潮が来たときには『これが最期か、運命か』と思った」というように、津波避難が間に合わず津波に浸っている様子、③は「戸板にのりながら流された」「津波に押し流された」という津波の流れによって流されている体験。④は「2メートル以上の波にもまれて気絶した」「目や鼻や耳、そして口の中には泥

塩水がつまりとにかく苦しかった」という、津波にのみ込まれながらも助かった体験談である。

どれも海岸から少し離れた内陸部での出来事であり、WAVEとしての津波では命を失う危険性が高いが、FLOODとしての津波では、津波との接触等がありながらも津波から難を逃れている人もいることがわかる。ただし体験談を読んでいくと、既に多くの人々が避難している中での「避難の遅れ」が津波と接触した原因であり、迅速な避難によって、このような津波のインパクトを受ける可能性は大きく低下することも考えられる。

(1) 津波に追われる

17) 津波を横切ると命を落とす

尾鷲市行野浦 東新一（当時32歳） 資料12

尾鷲造船で完成した定置網の船を浜に降ろす作業をしていた。地震のとき砂浜は立っていらなかった。地震がやんだとき岡さんが「これやったら津波がくるか分からんで準備せよ」と行ったが、皆は「津波なんでそんなバカなことはあるかれ」といって騒いでいた。ハッと沖を見たら、尾鷲湾全体が温泉のように真黄色になって、向井の下、大曾根の下がどろどろになって押し寄せてきた。「さぁこれやぞ。津波は横に逃げたらあかん、津波をうしろにおいて逃げなあかん、津波は一度にきて一度に引くもんじゃない、じわじわきて、それを横切っては足をとられ命を落とす」と聞かされて、船も何もほっとけということで瀬木山へ逃げた。

18) どこまで追いかけてくるのか

尾鷲市矢浜 北村清美（当時20歳） 資料10

夜勤の翌日のため寝ていた。布団の中でゆられるままこの世は終わりかと思った。コンロの上のちゃびんも石灯籠もそのまま5分位家のまわりを歩いていた。その時「津波だ、津波だ」と下地の人々が家の前を小学校に逃げてきたので、私もあわてて防空頭巾と防空かばんとオーバーをもって、裏の木戸から山の方に逃げた。ふり返った時、中川の道に沢山の材木がごろごろ、ざあざあ、まるで縦横十文字にごちゃごちゃと矢浜の入口から林の入口の間ををあげまわり、道は通れない位丸太の山だった。どこまでおいかけてくるのか「はあはあ」言いながらふりかえりふりかえり又走った。小川では海の如く魚が沢山およいでいて、自転車も流されていた。

(2) 津波に浸る

19) 私の首まで潮が来たときにはもうだめか

南勢町 五ヶ所浦 中村幸子（当時16歳） 資料3

寝たきりの父を救うため、津波の先潮と同時に家に入った。「お父さん、早く逃げよう」と声をかけると「お父さんは、長く寝ているからもうこのままでいい、お前は若いのだから早く逃げなさい」と言う。体の大きい父を背負ううちに、どんどん潮が満ちてきて、裏の廊下から逃げようと思った時には、潮の勢いがすごいので身動きができない。父を背負って廊下

で、私の首まで潮が来たときには、もうこれ以上、潮が上がってきたら逃げようもなく、私も一瞬「これが最期か、運命か」と思った。その途端、それまでどんどん押し寄せてきた波がぴたりと止まった。ああよかったと思う間もなく、今度は、引き潮に変わった。その潮の速さはすごく、父を背負っていても足をすくわれそうな勢いだった。

(3) 津波に流される

20) 上げ潮にのって流された

尾鷲市九鬼町 宮崎誠一（当時28歳） 資料13

昼食後、家で休憩していたところ地震があった。山仕事をしていた人が山すそから「津波だ」と大声で叫びながら通っていった。見ると湾の入口の岬のところにしぶきがあがっていた。急いで家に入り「戸を閉めて」という母の声に雨戸を閉め、裏口からまず母を避難させた。その時既に足下に潮が来始めていた。すぐ出ればよかったのだが、みやげなどをもちだそうと一瞬そこから出るのをためらった。そして裏から出ようと硝子戸に手をかけたがびくとも動かない。潮はどんどん増えてくる。その時幸いにも硝子戸が1枚ふわりとあいて、上げ潮にのって流された。自分が来ないので案じていてくれた人々の顔が見え、若者が差し出してくれた棒に手をかけて高台にかけあがることができた。

21) 無我夢中のまま津波に押し流される

紀勢町 吉田定士（当時9歳） 資料6

次男（弟）は、隣の人に連れられてさきに小学校へ逃げた。母親は三男を背負い、非常袋に貴重品・米などを入れて逃げ出した。母と私が四つ角に出ると、潮が満ちてきて腰まで浸かり、身動きのできない状態になってしまい、近くの家の石段によじ登った。その後、大きな津波が押し寄せたので、その家へ窓から入り2階へ避難した。その後は記憶にない。津波に押し流され、母親とも離れ、気がついたら戸板につかまって流されていた。近くにいた大人が私を引き上げてくれ私は助かった。母親と三男は長島道路付近まで押し流され、三男が水を飲み、命も危ない状態だったと、あとで母から聞かされた。無我夢中で、記憶もとぎれとぎれで、ただ恐怖におののき、悪夢のような出来事だった。

(4) 津波に飲み込まれる

22) 波に飲まれて気絶する

尾鷲市賀田町 榎本むゆか 資料12

地震のとき、近所の4～5人で畑でただ震えていた。揺れが静まり津波が来るのではないかと思いつつ、物をもって逃げようとして家へ走っていったとたんに2m以上の波にのまれて流されて気絶した。引き潮になり、鴨居に挟まれていたところ、私ともう1人が息を取り戻した。流されるなか、家の屋根にはい上がって助けてを求めたところ、病院近辺で出馬先生に引っ張り上げられて助けられた。

23) 志摩の海女さんがこんなところで死んでたまるか

南島町神前浦 梅谷みき (当時22歳) 資料5

地震からしばらくして、津波のため避難しようと家の窓を閉めていると、夫の父から「(津波でながされにくいように)窓は全部開けておけ」と言われた。閉めかけていた窓をあげようとしたその時、ゴーッというものすごい音とともに水が流れ込んできた。そして流されるたたみや長持ちに背中を押されるように窓からとなりの家の中へと押し流されてしまった。あっという間に水が天井まで流れこみ、部屋の中に閉じこめられてしまった。もう息もできない。目や鼻や耳、そして口の中には泥塩水がつまりとにかく苦しかった。それでも「志摩の海女さんがこんなところで死んでたまるか」と、かべや柱を手でさぐりながら必死で脱出しようとした。もがきながら苦しかった家のなかからやっと脱出した瞬間、息とともに泥塩水をゴクッと飲み込んで気を失ってしまった。次に気がついたのは、近くで助かりういていた父親にさおで叩かれた時だった。周りを見ると一面が泥沼のようだった。「どこでもいいからつかまれっ」と言う父親の声が聞こえた。つかまったのは自分の家の屋根だった。どろどろですべる屋根がわらの上に必死で登った。

4 津波から逃げる

津波とは直接接しなかったものの、津波からの様々な避難の様子を知ることによっても、津波が人々の心理や行動に与えた衝撃を理解することができる。津波避難は、津波との相対的な位置関係から、①より内陸・高所への避難、②沖合への避難、の2種類に分けられる。

①については、避難時における環境・諸条件は人々によって様々であり、様々な避難の形態があることがわかる。「腰を抜かした自分を助けてもらった」、「高齢者を大八車に乗せて避難したが、最期は自分が背負った」、「逃げるべき場所ではない(金庫の中)にあわや逃げるところだった」、「地割れの中に腰まで落ちてあわや大けがをして避難困難になるところであった」などの体験があった。また第1波の後、家に帰ろうとしたところを「津波はこれで終わらない! まだ帰ってはいけない!」と引き留められた経験もあった。津波避難は「より津波から遠い高所へ」という単純明快なルールがあるものの、人々に付随する環境・諸条件によって多くの心理状態・避難行動が生まれることがうかがえる。

(1) より内陸・高所への避難

24) 腰を抜かした私を助けてもらった

尾鷲市矢浜 野田三代子 (当時19歳) 資料10

造船所の男の人の「地震じゃ〜津波が来るから早よ逃げえ〜」という声で逃げた。途中、トロッコの線路は地盤沈下などでむちゃくちゃだった。腰を抜かした様で思うように逃げら

れない私を、ばあやん達が私のいないのに気づき探しに戻ってくれた。ばあやん達に引っ張ってもらいどうにかこうにか今西のところを上がって逃げた。

25) 地割れに腰まではまる

紀勢町 中世古復一（当時39歳） 資料6

当時は大敷の乗組員で、当日は網仕事をするために向井にいた。大きな揺れで山が崩れ落ち、地煙で前が見えなくなった。家へ向かう途中、道路は地割れをしていて、その地割れに落ちてしまい、腰まで入ってしまった。家で寝ている母を逃がすために、急ぐあまり、二、三度地割れに落ちてしまった。

26) あわや金庫の中に避難

紀勢町 中世古ひふみ（当時17歳） 資料6

当時、農協に勤務していて、備蓄米にふたをして逃げた。大敷組合に勤務していた森幸左エ門さんが「潮が来ているので早く逃げろ」と言われ、農協のシャッターを閉めて清浦園に向かった。途中、信用組合（現在の商工会錦支所）に入り、そこに大きな金庫があったので、最初はその金庫の中に逃げるつもりだったが、あいにく鍵がかかっており、入ることができず清浦園に逃げた。今になって考えると、その時鍵がしてなかったら私たちは助かってなかったかもしれない。その鍵は、私たちの助けの鍵だったと思う。

27) 義母を大八車に乗せて避難

紀勢町 中世古こむめ（当時35歳） 資料6

地震のあと、ちゅうけで目が見えなく寝たきりの祖母をどう逃げさせようかと私案した。向こう隣の海産商から大八車を借りて、布団を敷き、泣いている義母をその上に寝かせて、非常袋を持って、履き物もはずかに素足で車をひき小学校まで逃げた。途中、後ろをふり返ると、築地方面は潮煙が立ち上っていた。そこで大八車を置き捨てて、義母を背負い、非常袋を持って学校の裏山へ登り逃げました。その時は無我夢中でしたが、素足で逃げたので、ガラスの破片などで足を切り、痛みを覚えました。

28) 困難な避難

尾鷲市矢浜 北村なつか（当時24歳） 資料10

家で2人の子供と地震にあう。祖父は牛を追い祖母は幼児を背負い中学校に逃げた。逃げる狭い道には牛、牛で。牛津波に遭うんじゃないかと恐ろしかった。校庭の上で、実家へ貴重品を取りに戻るといったら「金はやる、行くな」と止められた。

29) 1回目の波が引いて戻ろうとしたが、止められる

紀勢町 谷口なみゑ（当時32歳） 資料6

地震のあと、私はおばあさんと5歳の長男と3人で手を引きあって、長島新道まで来たとき第1回目の津波が来た。波の高さは2mや3mどころではなく、砂と一緒に色で、見渡す限り一面に押し寄せてきた。1回目の津波は、私たちの足もとまで来た。1回目の波が引き、家に行こうとしたら「戻ったら危ないで、そこにおらなあかん」と誰かが言ってくれたので行かなかった。土色の波が目一杯に押し寄せ、凄い波の高さで、子どもなんかもおぼれて流

されてしまい、「助けてー」と泣き叫ぶ人もいて凄まじい映画のような光景だった。

(2) 沖合への避難

30) 船で沖に出る

海山町長浜 世古（当時14歳） 資料12

尾鷲市須賀利から海山町の三井造船まで、対岸から毎日通っていた。地震が収まったあと、家へ帰るべく船着場迄行き船に乗ったとたん、さざ波を立てながら潮が急に満ちてくる感じで陸地がだんだん遠くなっていきました。手こぎ船だったこともあるのか「これが津波かなー」と思うくらい静かな感じで、対岸に到着して船を降りるときもさほど危険を感じなかった。しかし峠を越えて須賀利へ帰ったら一面が海で驚いた。湾奥ではなかったことで恐怖感がなかったのだと思う。

31) いっそ船と一緒に流されよう

熊野市 浜田谷五郎 資料14

新鹿港の湊川河口近くの海に機帆船福丸は停泊し、船で休んでいた。突然船は強烈に揺れ始め、船底は「ドンドン」と叩かれた。浜の人たちはどこか逃げたため、私もなんとかして逃げようと思い仕事着をまとめ本船から伝馬船に移った瞬間、目の前の磯際で潮がブクブクわき上がるように水かさが増えて来た。このまま脱出することは非常に危険で、どうしても逃げられないものなら一層のこと船（福丸）と一緒に流されたって仕方ないと覚悟を決め本船に引き返した。間もなく2丁の錨綱と端綱で固定されている船は、錨もろとも湊川を上流へながされた。津波の流れは想像を絶するほどの強烈で、私の船はずっと川上に行き着くと、海水の流れは一旦とまり、又逆方向の下流に向かって凄い勢いで瀬になりながら海に流れていき、あっというまに河口近くまで戻された、「俺はもうこの世の終わりか」と諦めたとき、船は庚申様の横の田の岸に運良く止まった。この機会を逃せばもう助かるすべはないと重い、必死で田圃に飛び降りた。

5 津波をどう察知したのか

最後に、津波というインパクトには直接触れていないものの、津波という事態がやってくることをいち早く察知した例について、①地震＝津波連想、②言い伝え、の2点についていくつか紹介する。

(1) 地震＝津波連想

まず、「地震＝津波連想」について紹介する。津波避難で大切なのは「地震＝津波連想」である。つまり、沿岸部にいて地震の揺れを感じたら、「即、津波の危険性を思い出して、高い場所

(高台・高い鉄筋コンクリートビルの上階など)に避難する」ことを連想し、そして「最初の波が収まったあとも、第2波・第3波があるため、津波警報が解除されるまでは戻らない」という鉄則である。ここでのポイントは、地震直後に「地震の詳しい情報を得ようとしない」「警報を待たない」「どんなにあいまいな状況でも逃げる」ことである。人間は、地震発生後に、被害も警報も変わった様子もないと「正常性バイアス」が働く。つまり「あまり大したことはないだろう」と思って行動をとらない心的機能である。これは日常生活においては、刻々と変わる環境変化に人間が適応するための大切な心的機能だが、地震津波時に正常性バイアスが働くと、命を奪う仇ともなる。体験談からは、地震＝津波連想が育まれていた地域があることを知ることができる。

32) 大地震に大津波が来るという言い伝え

紀勢町 谷口正平(当時26歳) 資料6

地震のあと、誰もなしに「津波が来る」と叫んだので、みんな仕事を投げ出して自分の家へと走り出した。というのも昔から言い伝えに「大地震に大津波が来る」と私たちは聞かされていたからだ。今考えると、地震のときに一番役に立ったのは「大地震に大津波」と、言い聞かされた事だと思われてならない。もしあの時、大津波のことを知らなかったら、もっと大きな災害になっていた。

33) 母は、おばあさんから聞いていた

南勢町 五ヶ所浦 中村幸子(当時16歳) 資料3

母はおばあさんに聞いた話として、「ここは海が近いから、大きな地震がきたら必ず津波がくる。おばあさんの時代は、田圃に牛が必要で飼っていたが、大きな地震のあと津波が来て、大事な牛がもうもうと啼きながら太平洋の方に流されていったような、その姿を見てかわいそうで又怖くなり、高いところに引っ越したそうだよ。大きな地震があったら、すぐ井戸を見ると、井戸水が引いていくと聞いている」と折にふれて、よく話をしてくれた。

(2) 過去の経験・言い伝え

津波常襲地域であった三重県の各地においては、過去の体験者による教訓等の言い伝えも残っている。ただしその言い伝えは、1回の体験をもとにした教訓であり、科学的根拠が乏しかったり不明なものも多い。体験談を拾っていくと、「地震のあと津波が来るまで、御飯を炊く時間は十分あるので、御飯は炊いておけ」という言い伝えが当時は広く浸透していたため、「こんなはずではなかった」という体験談も見られる。また、「井戸の水が一度ひいてから上がってくると津波がくる」という教訓も広く浸透していた。

当時は「稲むらの火」が教えられていた時分であった。稲むらの火は、1937(昭和12)年から1947(昭和22)年まで国定教科書に採用されていた。そのため、「稲むらの火」を思い出したという体験談も多く見られ、学校教育による防災への一定の効果を知ることができる。

34) 津波が来るのが早くて恐ろしかった

尾鷲市矢浜 野田美代（当時23歳） 資料10

津波が来るのが早くて地震よりも恐ろしかった。自分と子供が必死に逃げるのに一生懸命だった。津波が来るまでに御飯を炊く時間等ありません。

35) 御飯を炊くひまはなし

尾鷲市天満浦脇浜 松崎ふみ（当時30歳） 資料13

父はこんな大きな地震のときはあとで津波が恐ろしいので、母に避難するときは御飯を一釜炊いておけとって海に気を配っていたが、御飯を炊くひまなんかなかった。

36) 井戸の水が一度ひいてから上がってくる

南島町神前浦 梅谷みき（当時22歳） 資料5

地震のとき、玄関先にあった井戸ポンプを見てみると、水がジャージャーと流れ出ていた。「井戸の水が一度ひいてから上がってくると津波が来る」と小さい頃から教えられていたので、「もしかして津波が来るかもしれない」と思い、妹たちは裏山へ避難させた。しかし、夫の両親はすぐに津波が来るとは思っておらず、浜にほしてあったにぼしをしまいに行った。

37) いなむらの火を思い出した

尾鷲市矢浜 相賀泰（当時11歳） 資料10

矢浜国民学校の5年生だった。学校で地震にあったあと家に帰ると、要蔵屋（野田酒店）の甚太郎おじさんが自宅の屋根に登り「沖があかるい、津波じゃ」と叫んでいた。その時、4年生の時に教えてもらった「いなむらの火」を思い出した。その後、中学校の桜の木から見ると、押し寄せてくる波で灯台が見えなくなり、少し時間がたってから今度は十数隻の木材運搬船や漁船が沖へ流され、又少し時間がすぎると今度は町の方へ押し寄せられてくるのを見た。

第2節 その後の対応

1 復興への歩み

(1) 復旧工事のための補助金・資材の配給

知多地方事務所管内の町村での、各種施設の調査については前述した。この調査報告書は内務省地方局へ上申されたが、内務省は、復旧費500円以上の役場庁舎及び附属施設、隔離病舎について補助金を下付する予定であった。補助金申請の対象となった知多地方事務所管内の施設は、表の通りであった。

こうした各種施設の復旧工事のために必要な資材を手当てすることが、愛知県の課題であった。『震災関係書類』によれば、4月から7月にかけて、県は知多地方事務所へセメント・木材・釘などを配給している。この史料には「復旧工事ニ要スル物資所要数量調」が載っており、木材4,280石、釘1,100貫、針金120貫、瓦15万320枚、セメント360袋、硝子9,800枚となっている。

(2) 空襲下での復興作業

戦争中での地震の勃発をうかがわせる回想記もある。豊橋実修高等女学校から中島飛行機に学徒動員されていた山本てるは、地震の瞬間に「敵機が上陸して艦砲射撃が始まったらしい」と、周辺の友人たちと出口に殺到したと回想している^{注1}。

飛行機の増産は、戦争の天王山としてのフィリピン戦線の渦中、焦眉の課題であった。中島飛行機製作所では、多大な被害を受けた生産体制を回復させていくために、10人単位の班をつくらせ、皆勤運動を実施した。この運動は、工員・学徒の「特攻精神」を計る物差しであり、この運動期間中に419組の皆勤班を生み出した^{注2}。

知多郡旭村は、1945（昭和20）年3月13日空襲に見舞われ、北粕谷地区の22戸が破壊された。旭村の部落常会記録によれば、1月2日に地震の罹災民の収用のため社務所・大興寺・公会場などの手当てが行われたのに続き、空襲翌日の3月14日には北粕谷罹災家屋を取り片付けるための勤労奉仕のことが話し合われていた^{注3}。地震の被害は、住家の半壊20戸、非住家の半壊40戸、工場・学校の半壊2戸であった^{注4}。

復旧事業は、繰り返される空襲という困難な条件下でなされなくてはならなかった。中日新聞記者であった水谷鋼一は、「労務、資材不足に加えて、敵機頻襲のため燈火管制下、夜間作業が行えず、復旧工作きわめて困難を加え、容易に進捗しなかったとメモに残している^{注5}。こうした状況下でも、軍需工場と鉄道の復旧だけは優先的に措置が講じられたという。

(3) 防空訓練と災害救済

愛知県内の警察、消防署、警防団などの警備諸機関に対し、12月8日の「大東亜戦争開戦三

周年」を前にして、12月6日から特別の警戒態勢に入るよう指示がなされていた^{注6}。そして、「総動員警備計画ニ基ク警備員ノ配置竝之ガ活動モ迅速的確ニ行ハレタ」と、防空体制が救済活動を円滑に進めることができた要因だと、愛知県は評価していた。

名古屋市南区二条町に住んでいた田中勝の体験記からも、そのことは確認することができる。田中によれば、愛知県から空襲があるかも知れないという警報が出ていた^{注7}。このため南区明治連区では、地震当日の午後から南警察署・明治警防団の計画に従って、防空訓練が実施されようとしていた。区内へ訓練警戒警報が伝達されようとした瞬間に、突如地震が襲ったという。連区ではすぐに防空訓練を中止し、防災体制に切り替えた。田中は当時、明治連区警防団警護部長・警察補助員部長を務めていた。彼は警護部員を指揮して、交通整理や被害地への救援を行った。警防団の消防部は火災の警戒にあたり、工作部は負傷者の救護や倒壊家屋の復旧にあたったという。各町内会では防空訓練のために、各戸の水槽に水を満たし、防空用具も用意されていた。男は巻脚絆に鉄兜、女はモンペ姿に防空頭巾の出で立ちであった。また、警防団により速やかに罹災者のための炊き出しや、町内会を通じて配給品の支給がなされた。田中は、この防空訓練の計画によって被害が軽減されたのだと、体験記では強調して書いていた^{注8}。

先に引用した愛知県警察部調査の「震災被害状況概略」には、罹災者と復旧工事者のために、即時に応急炊き出しや乾パンなどの配給が実施に移され、このため「罹災者冷静ナリ」と判断されていた。

2 「空襲は地震の連続だ」

(1) 精神の鼓舞

新聞報道を見ると、被害の状況ではなく、各種団体が協力して罹災者の救護にあたっていることに報道の力点が置かれていることははっきりしている。例えば12月8日付け『中部日本新聞』では、救済活動の中に「一億戦友愛」を見出し、「敵機来らば来れ」という声が被災地にあふれているという記事が書かれている。

こうした報道の姿勢は、12月9日付け『中部日本新聞』で、栗原大本営海軍報道部長が8日に行った談話を大きく取り上げたことに現れている。「家がなくとも身体あり、この意気が勝利の力」とのタイトルが付けられたこの記事では、「意義ある開戦の記念日を前に、これは確かに天がわれわれに与へてくれた試練である」との栗原の談話を載せた。そして同じ日に「震災は天の試練、隣人愛に明るき復旧」とのタイトルで、市内の各種団体・市民が、相互扶助的な救済活動に敢闘精神を発揮している詳しい内容の記事を載せていたのである。具体的に進められつつある救済活動が、「隣人愛」、「戦友愛」、「涙ぐましい敢闘」などといった言葉で讃えられ、直接の救済活動に加えて、防空意識を高めるような工夫が記事になされていた。

中島飛行機製作所内に組織されていた産業報国会の機関誌『中島産報回覧板』第9号（1945

(昭和20)年1月10日発行)には、「戦友の屍を乗り越え苦難を押し切らう」と題する記事で、勤労学徒に地震が与えた精神的ダメージを認めつつも、空襲ではなく地震で死んだ友人たちの無念を晴らすために、職場で精勤することが大事だと論じた^{注9}。

『中島産報回覧板』は地震後に、工員・学生を鼓舞する次のような文章を書いている^{注10}。

醜敵米英を地獄の底に叩きこめ！皆勤こそ職場の特攻隊だ

十二月七日の震災は、わが工場にも少なからぬ打撃を与へた。殊に殉職された工員並びに学徒諸君に対しては心から弔意を表する次第である。だがわれわれは此の災害に絶対に勇気を失ってはならない。此の災害を乗り越えて、飛機生産に突進しなければならない。そしてこそ、なき戦友も、地下において皇国最後の勝利を信じ安んじて、瞑目することができる。(略)諸君グツと頑張ろうではないか。12月16日から2月15日までの二ヶ月間に亘って実施される「必死増産職場皆勤運動」には、ぜひ優秀な成績を上げて、醜敵米英を地獄の底に叩き込もうではないか。

サイパン・テニアン・グアムの陥落など、日本軍は敗北し、またフィリピンではレイテ島の激戦が続いていた。前線における飛行機の不足を補うために、必死の増産がなされなくてはならなかった。

こうした中島飛行機の機関誌が、飛行機の増産への専心を訴えた背後には、既に12月11日に、岡田東海軍需監理部長が愛知県庁に県下の軍需工場の代表を集めて、「血戦に震災が何だ、必死に増産に当たれ」という訓示をしたことがあった^{注11}。ここで岡田監理部長は「震災被害は実に軽微だった。生産も全体の上からみて大体異常はない」と語ったという。そして岡田は、日本の生死がかかるフィリピン戦線で戦う戦士を思い、「震災位で腰を浮かすやうなことは断じてあつてはならぬ」という檄を飛ばしたのだった。

(2) 地震の教訓をいかす

12月10日付け『中部日本新聞』では、「震災の教訓を防空に活かせ」との記事を載せている。これは地震への対応・対策の中から、空襲の際にも応用でき、被害を縮小することができるような教訓を引き出そうとした記事だった。その教訓は次のようなものだった。

(ア) 消防防火^{注12}——初期消火の効果と危険薬品の地下管理

(イ) 負傷者救護の工夫——救護所の増設と適切な救急手当^{注13}、倒壊した建物に押しつぶされた被害者の早期発見と素早い沈着な応援活動

(ウ) 緊急時の避難——人員点呼と緊急時の集合場所の事前設定

(エ) 工場での様々な対策——沈着冷静な待避と指導者の適切な指揮、火気への用心、水道・電気対策、ガラス窓の板張り化

(オ) 電話線切断時など場合に情報伝達の方法の確保

(カ) 夜間における配給などの諸活動の準備

12月12日の同紙上にも、「今度の震災は空襲時の救急用品として三角巾の常時携帯を痛感させ

た」として、名古屋市健民局が、市民すべてが三角巾と包帯の用意を怠ることがないように、それらの簡易な作り方を紹介したのだった。

3 災害情報の管理

(1) 被害情報の秘匿

東南海地震の被害情報が管理されていたことは、中井良治の手記からわかる。中井は、京都の烏丸商業学校から中島飛行機に学徒動員されて、山方工場で働き、地震では辛うじて工場内から逃げ出すことができた。中井は京都の親元に「地震で寮の壁に少しひびが入った」という程度にしか、手紙で知らせることができなかつたと回想している^{注14}。

中部日本新聞社記者であった水谷鋼一は、防空本部や県内の警察署から地震の被害情報を集めていた。水谷は、県内の32警察署の死傷者数、全半壊家屋数について、地震当日午後9時現在の数値を把握していた^{注15}。しかし、これらの被害の状況が報道されることはなかつた。水谷は被害全体を、倒壊・半倒壊家屋5万戸以上、罹災者200万人以上だと推計していた。水谷の記録には、「建物被害のうち、名古屋市南部における重要工場の被害は、時局下多大の痛手というべく、鉄道被害と併せ、今回の震禍は戦争遂行上に相当の影響を与えたるものである」と書き残している。

こうした被害の実態が新聞紙上で報道されなかつたのは事実であるし^{注16}、また手紙で地震の詳しい情報を知らせることには制約があつた。しかし、罹災者の救済にとって必要な情報は適宜新聞で提示された。例えば、『中部日本新聞』12月9日号には、罹災者に復旧資金を貸し出すことを報じた「庶民金庫貸出」という記事や、名古屋市建築課の技術員を現地に派遣して、復旧可能な建物への技術指導を行うという記事が載せられた。また12月10日号では、「震災地に非常金融」という記事があり、大蔵省が罹災者に対して特別の金融対策（貯金の払い出しや国債などの買い上げ、生命保険料の簡易払いの実施、復旧資金の迅速適正な供給など）が取られることを報じている^{注17}。

しかし他方では、災害情報の管理の一環として、新聞に美談が載せられていった。「自宅倒壊にも帰らず」と題した記事では、某工場では自宅が倒壊したにもかかわらず、生産の現場の復旧に不眠不休で尽力した人や、某工場の電気保安担当者は地震以来一度も職場を離れず、電力の確保に努めたなどの美談が紹介された^{注18}。

三河地震の新聞報道は、さらに情報の管理が強められたと思われる。三河地震が起きた翌日の1945（昭和20）年1月14日、最初の『中部日本新聞』では「名古屋を中心とする尾張部と工場その他の重要施設は殆どこれといふ被害がなかつた」と報じられた。そして、罹災者は再度の震災にも不安動揺の色はないこと、この程度の天災で飛行機増産に支障があれば、前線兵士に申し訳がないといった、「この程度の地震が何だ」という観点からの記事が書かれた。また「戦

局は日一日と危急をつげてゐる。我々日本人は災厄が重なれば重なるほど伝統の粘りを發揮して」軍需と食糧の増産に尽力せよとの吉野愛知県知事の談話を載せていた^{注19}。

【第3章第2節注釈】

注1 『続半田の戦争記録』, 217.

注2 「中島産報回覧板」第10号『半田の戦争記録』, 294.

注3 『知多市誌』資料編四, 知多市役所, 1984年, 615.

注4 『知多市誌』本文編, 知多市役所, 1981年, 546.

注5 水谷鋼一・織田三乗『日本列島空襲戦災誌』出口啓輔, 1975年, 452.

注6 『昭和19年12月7日震災記録』

注7 「畑山喬司の体験記」『半田の戦争記録』, 11.

注8 愛知県総務部消防防災課編・発行『地震体験記録集』, 1978年, 15-16. 12月8日付『中部日本新聞』の記事によれば、静岡県下でも「鍛え抜いた防空訓練の成果が十二分に發揮された」という。

注9 「中島産報回覧板」第9号『半田の戦争記録』, 293.

注10 『半田の戦争記録』, 292.

注11 『中部日本新聞』, 1944(昭和19)年12月12日号。また12月13日号では「地震、空襲何物ぞ」という記事を載せ、フィリピンレイテ島の決戦の渦中、銃後で勝利へ向けて絶大な努力をしなければならないと小磯首相が語ったと述べ、「区々たる爆撃や今次の震災等は敵殲滅、大東亜戦争完遂に邁進すべき途上における当然の一波瀾」に過ぎないという首相の談話を記事にしている。地震や空襲の被害をすべて国民が背負いながら、それを試練として打ち勝たなければならないという戦勝へ向けて献身的な努力をすることが求められたのである。

注12 『昭和19年12月7日震災記録』では、特に名古屋市内で発生した10か所の火災の多くが、地元の警防団の迅速的確な初期消火で被害を最小限に食い止めたことを特筆していた。

注13 『昭和19年12月7日震災記録』は地震後の重軽傷者の救護体制について、「地元救護班ノ活動ニ依リ適切ニ行ハレタルモ、被害大ナル地域ニ対シテハ、県ニ於テ特別救護班ヲ編成シ、現場ニ急行応急救護ニ当タシメタリ」と述べている。

注14 『続半田の戦争記録』, 254.

注15 前掲『日本列島空襲戦災誌』, 450-451.

注16 1943(昭和18)年9月10日鳥取地震(死者1,210人、重軽傷者3,869人、家屋全壊13,295戸)の時の情報管理について、西田良平は「鳥取地震の前年の一九四三年六月にはミッドウェイ海戦があり、四三年五月にアッツ島の日本守備隊が玉砕するなど、戦局が厳しい状況であったため、被害域全体の被害状況についての十分な調査はなされなかった。また東大地震研究所の研究者が詳細な余震の観測研究をするために、鳥取まで出かけてきて帰京すると、所内の空気は閉鎖的となっていて地震データの公開などの自由が著しく制限された。報道管制も厳しく、新聞が惨状を生々しく伝えることを禁じ、ラジオも通りいっぺんの報道しかされず、地震被害の全容は国民には伝わらなかった。さらに、調査された資料も終戦時には破棄され現存しているものが少ない。鳥取地震を調査するとき、資料がなく全貌を掴むことができない最大の理由は太平洋戦争である」と述べている(「鳥取地震と戦争」『鳥取・米子と隠岐』錦織勤・池内敏編, 吉川弘文館, 2005年, 153-154.)。

注17 このような特別な金融対策は、空襲被害があったときと同様な措置として、震災にも適用された。この他の措置として愛知県と名古屋市が震災罹災者に対して県税・市民税の減免が実施されると報道された(『中部日本新聞』1944(昭和19)年12月16日号)。

注18 『中部日本新聞』1944(昭和19)年12月9日号

注19 『中部日本新聞』1945(昭和19)年1月14日号

第3節 想定東海地震との関係

1 東海地震提唱の経緯

想定東海地震と1944（昭和19）年東南海地震は密接な関係にある。東海地域に巨大地震発生の可能性が議論され始めたのは、1970年ごろからである。Mogi（1969）は、国土地理院の精密三角測量の成果をもとに、東海地域には歪みが蓄積されていることを明らかにした。Mogiは、プレートテクトニクスに近い考えに基づき、東海地域に、巨大地震が発生する可能性があるとして指摘した。その後、杉村（1972）により、当時不明確だったフィリピン海プレートの境界が、駿河トラフ湾から相模湾に続くことが明らかにされた。Ishibashi（1981）は震度分布や地殻変動のデータを用いて、1707年宝永地震及び1854年安政東海地震（想定東海地震＋東南海地震）の震源域は、駿河湾の奥まで達していたが、昭和の東南海地震は駿河湾の中まで達しないことを示した。このため、駿河湾付近に、地震空白域（地震が起こるべき所にもかかわらず、しばらく起きていない場所）であると指摘している（図3-1、図3-2）。ここでは、想定東海地震とは、安政の地震で破壊した断層が、昭和の地震では破壊しない部分、つまり、割れ残り部分に相当する地震と考えられる。

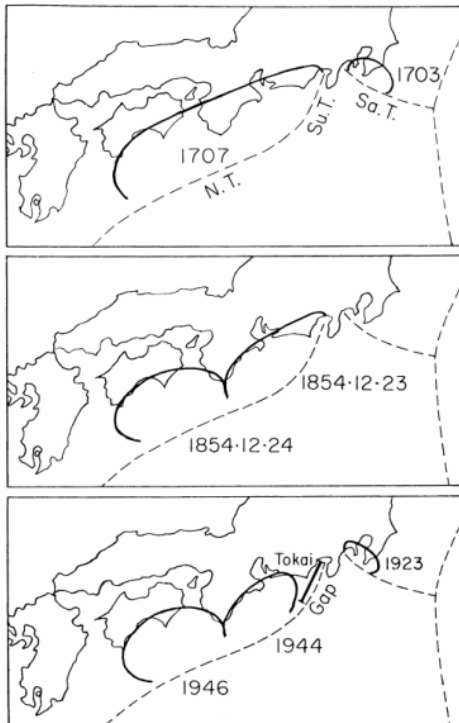


図3-1 (上段) 1707年宝永地震、(中段) 1854年安政地震、(下段) 1944年東南海地震、1946年南海地震の震源域 (Mogi, 1981)

注) 昭和の地震の割れ残り(未破壊)部分が、次の地震(想定東海地震“Gap”)の震源域と推定されている。

Copyright (1981) American Geophysical Union

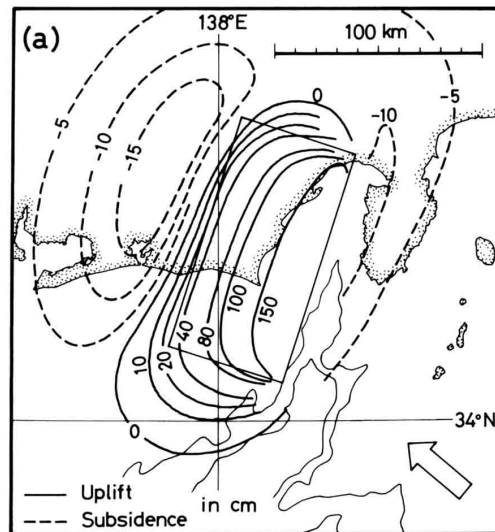


図3-2 想定東海地震の震源域(長方形)とそれに伴う上下地殻変動 (Ishibashi, 1981)

注) プラスは隆起、マイナスは沈降を示し単位はcm.

Copyright (1981) American Geophysical Union

2 大震法成立の過程

「東海地震」が大きな社会問題として取り上げられたのは、1976（昭和51）年地震学会秋期大会で、石橋克彦氏が「駿河湾付近は地震空白域である」と指摘した後である。さらに、1978（昭和53）年1月15日の伊豆大島近海地震（マグニチュード6.9）直後、政府は東海地震の予知を前提とした大規模地震対策特別措置法（大震法）を国会へ提出した。

この間、参考人として地震研究者や気象庁参事官などが国会に出席し、地震予知に関して意見を述べている。当時の地震予知に関する研究者の考えは、以下のようにまとめられる。

- 1) 地震現象は複雑で、まだ解明できていないことが多いが、
- 2) マグニチュード8程度の巨大地震には前兆現象が現れる可能性が高い。
- 3) 観測体制を充実すれば、これらをとらえられるかもしれない。
- 4) 東海地震は地震空白域であるから、
- 5) データを集約して監視すれば異常はとらえられる可能性はある。
- 6) 中国の海城地震の予知の成功は、日本での可能性を示唆する。

少なくとも、研究者側は大震法に反対とは明言していなかったし、マグニチュード8の地震に対しては、何らかの前兆的シグナルが現れ、それが予知に結びつくとの希望的意見が強かったものと思われる。地震予知の可能性があいまいなまま、地震予知を前提とした、強制力を持つ法律が成立した。その後、日本の地震に関する政策は、想定東海地震への対策や調査観測を中心に進むことになった。

3 地震空白域とは

ある震源域が、地震空白域と判断されるためには、以下の要件が必要とされる。

- 1) 震源域の区分ができ、1回の地震で全震源域が破壊する可能性があること。
- 2) 1回の地震が発生すると、応力が十分下がり、その後の応力の回復がゆっくりしているため、次の地震までには十分に長い時間がかかること。

特に、プレート境界の空白域の位置は、1) 断層の位置が明瞭であり、2) 発生間隔が数十年から百年程度と短いため、過去の地震活動から明らかにしやすい。

プレートテクトニクスの考えに基づき、地震空白域の存在を最初に指摘したのは、Sykes. (1971)である。Sykesは、歴史資料や地震活動データを基に、アラスカからアリューシャン、中南米、南米、日本などの沈み込み帯における地震空白域の検出を行った。McCan et al. (1979)は、その後、データを加え、地震活動のデータをもとに、環太平洋の地震空白域についてまとめた。1968（昭和43）年以降13か所の空白域を埋めるようにマグニチュード7.5以上の地震が発生したと指摘している。

これに対し、Kagan and Jackson (1991)はMcCanらの説を検証し、「地震空白域は大地震の起こりやすい震源域とはいいがたく、むしろ最近10年間では、大地震は以前に起きたところに続けて起こる傾向がある」と指摘した。一方、Nishenko et al. (1993)は、「Kagan and Jacksonの検証は、小さな地震 ($M_s > 7.0$) まで含めている、テストの期間 (17年間) が短すぎる、テスト期間中はたまたま地震活動が低かった」などと反論している。いずれにしても、地震空白域に、大地震が発生するか否かを短期間で検証するのは難しいと考えられる。

地震空白域説が有効に適用できた例としては、アナトリア断層 (トランスフォーム断層) があげられる。この断層では、空白域を埋めるように、次々と地震が発生した。さらに、この断層は、1980年代から地震予知のためのテストフィールドとして選ばれ、国際的な研究計画が進められていた。実際に、1999 (平成11) 年コジャエリ (Kojaery) 地震は、地震空白域を埋めるように発生していた。この地震の際には、国際観測隊が現地観測を展開していた。ただし、地震、地殻変動、地球電磁気の前兆現象は検出されなかった。

現在、世界の主な地震空白域は、メキシコ沖のGuerrero空白域とアラスカ沖のShumagin空白域が知られている。このうち、Guerrero空白域は、2001 (平成13) 年にゆっくりすべりが数か月続き、総すべり量はマグニチュード7.5の地震に相当するものだった。このようなすべりは、過去にも起きた可能性がある。今後は、地震空白域であるか否かの判断は、地震のみならず、ゆっくりとしたすべりも考慮に入れ、判断する必要がある。

4 駿河湾のプレートの沈み込み

想定東海地震の震源域である駿河トラフからの沈み込み速度は、南海トラフからの沈み込みに比べ、遅いと考えられている。Miyazaki and Heki (2001)は、南海トラフでは、ほぼ6 cm/yで沈み込んでいるものの、駿河トラフでは2 cm/yで沈み込むとしている。その差4 cm/yは伊豆半島の沖合、及び内陸部分で吸収されるとしている。これに対しては、異論があるものの、駿河トラフからの沈み込みが小さいのは、間違いないようだ。このため、駿河トラフの地震 (想定東海地震) は、南海トラフ沿いの地震とは異なり、長い間隔で発生する (たとえば1回置き) との考えもある。しかし、いずれにしても、想定東海地震の発生を否定できる積極的な根拠はないので、想定東海地震への備えは欠かせない。

5 前兆現象

東海地震が予知可能であるとの根拠は、茂木（1982）による水準測量データの詳細な解析結果であろう（図3-3）。東南海地震前日と当日朝の測量で、続けて2か所で往復の測量差が4mmに達したとSagiya（1998）は、東南海地震前後に行われた水準測量データ全体の観測手簿に基づき指摘している。鷺谷（2004）によると、東南海地震前後の往復差が4mmに達する測定は4回あった。このうち1回は11月25日であるため、再測定した結果、 -2.2mm と正常な値が得られた。もう1回が12月10日で、これも再測定の結果、 2.44mm と求められた。残りの2回が地震発生の当日続けて起きたことは、前兆的変動の可能性も棄てきれない。しかし、その他の時期に2回発生していたことは、測量誤差の可能性も否定できない。つまり、前兆的な変動か測量の誤差かは、判断できない。

一方、掛川から御前崎にかけて水準測量が行われ、地震直前と地震後の改測結果から図3-4のような変動が得られている。これらはどの時点で起きたかは明らかでないが、少なくとも地震直前ないし直後に起きたものと考えられる。ここで得られた地殻変動は中央部が隆起するもので、潜在逆断層により説明可能である。Ando（1975）はプレート境界面上のゆっくりとした動きと説明している。この種のすべりは地震の先駆的なすべりとしてモデル化され、現在では、東海地震の地震予知の有力なモデルとされている。

しかしながら、鷺谷（2004）は、「断層面上のすべりで観測値を説明するには、境界面上のすべり面の深さは10km程度と浅くする必要がある」と指摘している。つまり、東南海地震直前のゆっくりとしたすべりを、プレート境界上のすべりと考えるのは難しく、巨大地震近傍の内陸断層が付随的に活動したのかもしれない。東海地震の根拠としている変動が、プレート面上のすべりか否かを定める分解能があるかは、今後の検討の課題である。

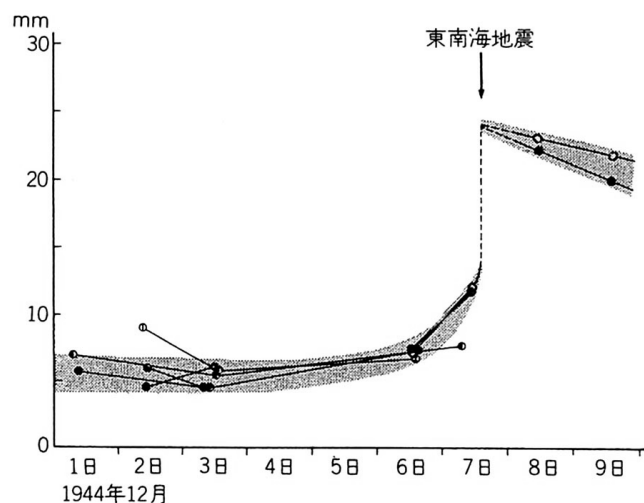


図3-3 東南海地震前の水準測量から求めた地殻の傾斜変動（茂木,1982）

注）地震発生の前日（12月6日）から変動が始まったと示唆された。ただし、それ以前の変化は、有意な変化ではない。

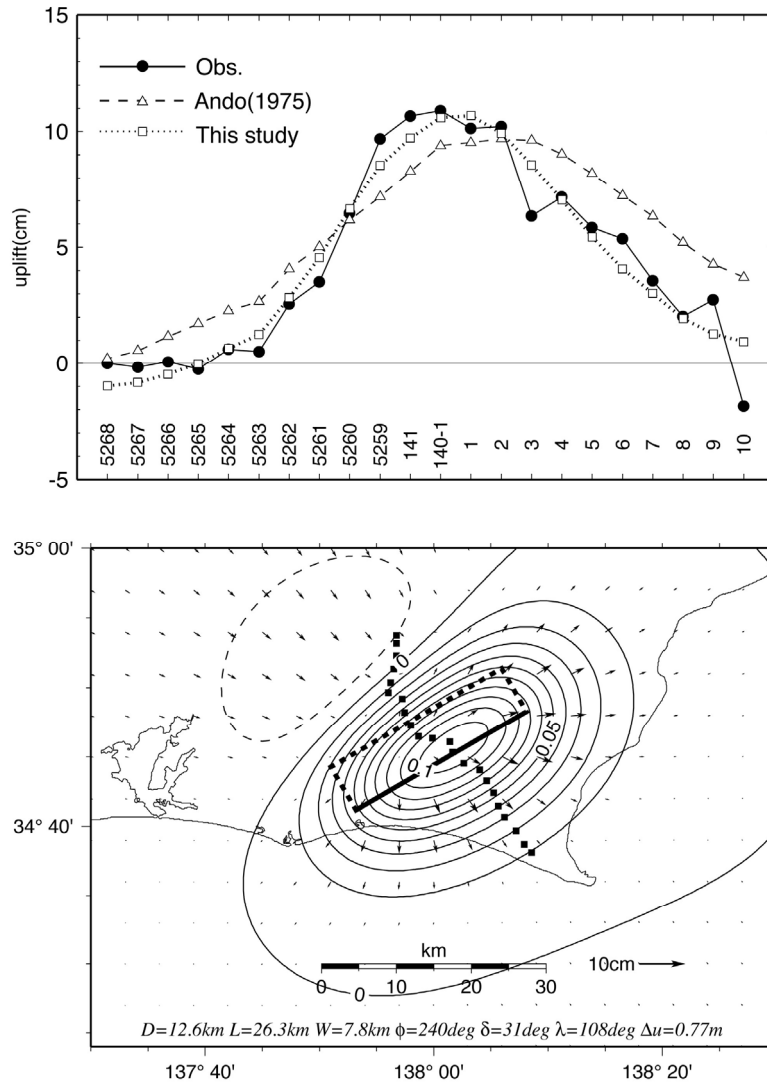


図3-4 静岡県掛川から御前崎に至る水準路線（下図）で得られた、
東南海地震を挟む上下変動図（上図）（鷲谷,2004）

注) (上図) 実線は測量結果と潜在断層（長方形）による上下変動。断層の深さが浅いと観測値と良く合うので、この動きは、浅い断層が動いた例と考えられた。

6 地震予知情報

予知関連情報は、下記の3段階にわたり、歪計のデータをもとに気象庁から発表される。情報の発令は、歪計の通常のノイズレベルに対しどれだけ大きな異常か、その異常が複数の観測点で現れたかを判断の基準としている。測定機器の誤作動やローカルな動きを、東海地震の前兆現象ととらえないような考慮がなされている。

①東海地震観測情報

東海地震との関係が不明だが、異常なデータを観測した場合に発表される。

②東海地震注意情報

防災準備行動をすべき段階で、東海地震の前兆現象の可能性が高まったと認められる場合に出される。

③東海地震予知情報

東海地震の発生のおそれがある場合で、これらを基に首相が警戒宣言発令をする。

- ・電気・ガス・水道は供給継続、電話は一般利用の制限がある。ただし、警戒宣言発令前でも災害用伝言ダイヤル（171）は利用可能となる。
- ・鉄道は強化地域内では原則運休されるが、想定震度が5強以下の地域では、事業者が安全運行可能と判断した場合は運行継続。
- ・道路は、強化地域内への進入制限。強化地域内での走行は極力抑制。
- ・バス・タクシーは強化地域内での運行を中止。
- ・コンビニなどの小売店舗は耐震性のある店舗では、店舗の判断で営業継続。
- ・郵便局・銀行は、窓口の営業は原則停止。通常時間内の郵便貯金払い戻し、銀行の現金自動支払機は可能な限り稼働。
- ・家庭では耐震性のある建物以外では、自宅の庭、付近の公園、広場、広域避難場所（広場）等安全な場所で待機する。

などとなっている。ただし、現在まで、注意情報、予知情報に相当する発表は気象庁からされた例はない。

7 まとめ

1944年東南海地震の震源域が、1854年安政東海地震より小さいことから、割れ残し（すべり残し）部分が地震空白域、つまり将来の大地震発生場所と指摘され、その準備がとられてきた。しかしながら、1944年東南海地震は、駿河湾の中までは達しなかったものの、その広がりについては、いまだ意見は収束していない。そのために、想定東海地震が単独で発生する場合の地震の想定規模は、かなりの違いが生ずる可能性がある。また、一方、東海地震が、東南海地震や南海地震と連動して起きるとの考えも根強く、今後も検討が必要である。